

# 火のついた踵

宮本百合子

青空文庫



人 物

奥平振一郎

統計学者（三十歳）

みさ子

振一郎の妻（十八歳）

橋詰 英一

みさ子の従兄（二十四歳）

谷 三郎

英一、みさ子の友人（同）

吉沢 朝子（登場せず）みさ子の友達（十九歳）

女中 きよ

場 所

東京。

時

現代。或る五月。

## 第一 奥平の客間

上部の壁や天井は白く、下部を、暗緑色の壁紙で覆うた洋室。

正面は、浅く広いヌック。大きい三つの窓に、極く薄い肉桂色の窓帷が、黒い鮮やかな飾紐で片よせられ、簡素な形のマホガニーの円卓子、布張の椅子、たっぷり薔薇を盛った花壺等が置かれている。

上手の壁際には、大きな金縁の額。書棚。長椅子。重い暗色の垂帳で、隣室と境している。

下手は、一間半ばかり、透硝子のフォルディング・ドアになっている。前後三尺ずつの壁間は、ヌックよりに彫像、繁った灌木の鉢。下手には、背の高いヴィクター、二人掛けの腕椅子等。硝子の折畳扉から差す日が、如何にも晴々と、床に流れ、家具を照し、扉の金色の把手や、鉢植の新緑を爽やかに耀かせる。

幕開く。舞台は空虚。

光りや色彩の快感が、徐ろに漠然とした健康や活力の感を見る者に味わさせた頃、  
おもむ

上手の垂帳から、みさ子が出て来る。（藤色のネルの着物、全体、さっぱりした服装）

みさ子 （部屋に入りながら、振返り）一寸こつちへ来て御覧にならないこと？ 綺麗よ。  
今日は、私がすっかり大掃除をしたんですもの。

振一郎 （黙つて入つて来る。黒っぽいセルの着付。四辻あたりを見廻し）ほう。綺麗だね。

みさ子 この部屋は、日がよく射すから、猶気持が好いわ。（ヌックの方へ行く）御覧なさいませ。一寸この薔薇！ 素敵でしよう？ 私こんなのが咲くとは思わなかつたわ。

振一郎 （気がなさそうに）よく咲いたね。

みさ子 匂いをかいで御覧遊ばせよ。いいじやあないの？ ほら！（花壺を持ち、顔を埋めるようにして匂をすい、良人の鼻先に出す）

振一郎 うむ。いいね。花を持つた枝は切る方が、来年のために好いんだよ。

みさ子 そうお。私が好きだから、どうせお部屋の花に切ることになつてしまふわ。（ヌ

ックの卓子の上に花壺を置き、そこの椅子に坐る）貴方もおかげにならないこと？

振一郎 （ぶらぶら行つて、向い合わせに掛ける）英一さん達は幾時頃来るの？

みさ子 わからないの。ただ、お昼つからつて云つてよこしただけなんですもの。——でも、きっともうじきに来るんでしよう、どうせ日曜ですもの一日、あの人達は暇なんだわ……（調子をかえ）貴方も今日はいいでしよう？

振一郎 さあ……

みさ子 駄目？

振一郎 しなければならないことがあるからね。

みさ子 （失望を抑え）たまだからいいじゃがないの？ 一寸でいいから一緒にお茶でも召上れよ。

振一郎 しなければならないことを控えて、表面ばかりおつきあいをしなければならないことはないだろう？

みさ子 それはそうだわ。——だけれども——あの人達だって、随分久しぶりで来るんですけどの……

振一郎 あなたが、ゆつくり遊んであげれば結構じやないか。

みさ子 だつて……（深く顔を曇らせる、遠慮しながら）貴方、あの人達の来るのがお厭なの？

振一郎 どうして？ 僕がそんなことを云つたかい？

みさ子 おっしゃりやしないわ。けれども——若し、悦んで下さるなら、暫くの間位、皆で、気持よく楽しんで下さるのじやあないかと思うの。貴方は、私独りで遊んでもあげれば好いだろうつておっしゃるけれど——そうじやないのよ。

振一郎 僕は僕で、仕事の責任があるんだから、仕方がない。ね？ そうでしょ？ あなたや、英一さん達みたいに、遊んでいて好い人間ではないんだから。

みさ子 （淋しそうに）何だか、きめつこのようね。私一度でも好いから、貴方にも一緒に面白く遊んで戴きたいわ。いつも、いつも——お仕事！

振一郎 そんな子供のようなことを云うものじやない。

みさ子 （涙ぐみ）子供のようなことじやないわ。どこに、自分の好きな人も一緒に楽しまないでいるのに、平氣で嬉しがつていられる人があつて？（強いて確かりし）ね、貴方、これからこうしようじやないの？ 貴方が来て貰つては困るとお思いになつたら、はつきりそう云つて頂くの。そして、私、断つてしまふわ。その方が……どんなに心持がいいか判らない……

振一郎 何もあなたの處へ来ようという人を、僕が厭だつて断る訳はないじやあないか、

そんなエゴイストじやない。

みさ子 それが間違いだとはお思いにならない？ 来る人は、私共二人の処へ来るのよ。それなのに（涙が危くこぼれそうになる）いつも、私一人ぼっちでお相手をして、奥平さんはどうなさいましたって訊かれるの……おまけに貴方はちつとも楽しそうではないんですもの——私、どうしていいか判らなくなつてしまふわ。

振一郎 判らないことはない。あなたは僕のことなんか忘れて、愉快にすればいいんだ。その方が、僕にとつたつて、どの位のんき呑氣のんきだか判らない。

みさ子 （疑わしそうに、良人を見） そう？ ほんとに？

振一郎 （力を入れ） ほんとにそだとも！ 若し僕が暇で気が向いたら、いつでも出て来て仲間に入ればいいでしよう？

みさ子 そなほんといいわ。（嬉しそうに） ジやあ、後で出て下さること？

振一郎 いつ？ 今日？

みさ子 （勿論と云うように） そうだわ。

振一郎 判らない。まああなただけで接待していくれ。

みさ子 ——それじゃあ同じだわ……あほんとに（椅子を立ち、歩き出しながら嘆息す

る)

振一郎 (気にし) どうしたの?

みさ子 (凝じつと、憂わしげに良人を見る) 私共の處でさえこうなんだから、よその奥さんが、自分のお友達さえ呼ばなくなるのは無理もないと思つたの。

振一郎 物事を、何でもそう惡意にとるものじやない。僕の云う真意を諒解しなければ、いつでも、詰らない衝突を起すばかりじやあないか。

みさ子 (熱心に) ほんとに、私も私の心の奥の奥が判つて頂きたいわ。理屈じやあなく、私の感じることを、貴方の胸で感じて頂きたいわ。

振一郎 ——お互のことだ。……要求は限りないものだからね。人間は、五のものを与えられると、必ず七のものまで得ようとする。――

みさ子 ——

振一郎 とにかく、僕は失礼させて貰うから、皆さんによろしく。――勿論用があつたら、いつでも来ていいんだからね。

來た垂帳の方から去ろうとする。みさ子、思わず後を追い、何か云おうとする。が、やめ、元氣を失い、詰らなそうに、ぐつたりと傍の長椅子にかける。

みさ子　（ひそやかに、独白）ああ、どうして、ああなんだろう……？

長椅子の端に肱をつき、凝つと前を見つめ考えに耽る。やがて、寂しさに堪えられないらしく、急に立上り、書棚の傍のベルを押す。きよ登場。

きよ　お呼びでござりますか？

みさ子　ああ、あのね、私の部屋へ行つて、やりかけのステイツチを持つて来て頂戴な。きよ　はい。（去る）

みさ子所在なさそうにヌックの方に行き、腰を下して、花壺の花をいじる。寧ろ、心は内へ内へと沈み、指先だけが無意識に微かな運動をするという風。

きよ、愛らしい紅色の繻子張小籠を持つて来る。

きよ　これでよろしゆうござりますか？

みさ子　有難う——鍊があつたかしら（籠の中を一寸検べる）ああ、これでいいわ。それからね、お客様がいらしつたら、直ぐこちらへお通しして頂戴。私ここにいるから——

きよ　はい——。先ほどのお菓子は、いつものお皿でよろしゆうござりますか？

みさ子　ああいわ、あの花のついた方ね。

きよ、軽く会釈して行きかける。

みさ子 あ、きよや、旦那様は何をしていらっしゃるの？

きよ （立止り）さあ……先ほど、御書斎の方において遊しましたが……

みさ子 それならいいのよ。有難う。

きよ、去る。

みさ子、卓子の上の小籠から、白い、センター・ピースを出し、ぽつぽつ縫取を始める。けれども、心は落付かず、折々凝つと、細い指に嵌はまつた結婚指環を眺めたり、我と我心をなだめるように、髪を撫であげたりする。感じは内に満ち、満ち、而も、表すに途のない素振り。ほどなく、垂帳の裏から、

きよの声 奥様？

みさ子 （頭を押えていた手を落し）なに？

きよ （部屋に姿を現し）橋詰様がいらっしゃいました。

みさ子 おひとり？

きよ いいえ、あの……

云い切らないうちに、足音。若い男の声。

谷 僕も一緒ですよ。

谷三郎、橋詰英一、連立つて快活に現れる。

谷 やあ！ 今日は。

みさ子 （ひとりでに、活々とし）まあ、よくいらしつたわね。今日は。

英一 今日は。

みさ子 先ほどは、お電話をありがとう。

英一 どう致しまして。

谷 実はね。あの電話は、僕がせつづいて掛けさせたんですよ。たまに上るのに留守をくわされては堪りませんからね。

谷、英一、各々ほどよい処に自分で席を定める。

みさ子 （縫取を片づけながら） そうだつたの？ 大丈夫よ。 私共<sup>そと</sup>が二人で留守をするこ  
となんか、一年に、ほんの数えるほかありはしないわ。

英一 然し、何にしろ、素晴らしい天気だからな——戸外は、なかなか暑いですよ。 ——  
一寸そこをあけてよう<sup>ゲ</sup>ざんすか？

みさ子 ああ、どうぞ。ほんとにね、ずくんでいるもんだから……

英一、フォールディング・ドアの方を開く。

みさ子（其方に顔を向け）ああ好いこと。まるで夏のようね。

英一、席に戻る。

みさ子 この頃はいかが（笑顔で二人に）相変らず？

谷 別に目醒ましいほどのこと也有りませんね。教師は教師で、生活難で萎縮し切つた講義をやるし、学生は学生で、浮腰だし……（それとなく室内を見廻す）

英一 おまけに君は、中で一等の遊動体だろう（笑う）——それにしても、随分会いませんでしたね。あの音楽会は、何でも正月頃だつたでしよう？

みさ子 もうそうなること？ ミス・ペブロスカの時だつたわね、あれは――

英一 ザつともう半年だ。あなたの方にこそ、興味津々たる話があるでしよう？

みさ子（笑わず）そう見えて？

英一（やや 稍てれ）詰問されても困るけれど……（苦笑）相変らずですね。

きよ、茶菓を運んで来る。皆黙っている間に、配り終り、静に退場。沈黙を破り、

谷（みさ子に）奥平さんは？ お変りなしですか？

みさ子 ええ有難う。相変らずよ、表ばかり拵えているわ。

谷 はは、表ばかり！ か。――（さりげなく）ほかにお客様はなしですか？

みさ子 なし。ある筈だつたんだけれども――

英一 （急に大笑いをする）ははははは。三郎、到頭兜を脱いだな？

谷 ━━（知らぬ振り）

みさ子 いやね、いきなり。どうなさつたの？

英一 何ね。（谷を顧み）いいだろう？ 云つても――。

谷、わざと煙草の環をふく。

英一 昨日、或る友人の処へ行つたらね、吉沢のお嬢さんの噂が出てね、わあわあ云つて  
いるが、その男の妹が、あの方なら、あなたの親友だ。きっと今日あたり、奥平さんの処  
へいらしつてよ、なんかと云つたものだから……

みさ子 まあ！ それで来て下さつたの？ （谷の方を向き、わざとおどけ）どうも有難  
う。

谷 （笑いもせず）いや、どう致しまして！

皆、笑い出す。

谷 で、どうなつたんです？ 来ないんですか！

みさ子 ええ、おやめになつたの、いつか静かに二人きりで話したいからつて。――（真

面目に）あの方も近頃は、結婚問題や何かで、随分苦しんでいらっしゃるのよ。余り美しい方だもんと、却つて、種々いやなこともおありになるのね。

谷 それで、結婚生活では、少くとも半年の先輩であるあなたに、指導を仰ぎたいという訳ですか？

みさ子（谷の一種の調子には頓着せず）黙つて独りで考えているよりは、私にでも話して相談して見たいとお思いになるらしいの。無理もないわ。——お父様だつて、お母様だつて、お金こそ沢山おありなさるけれど、随分変な方なんですもの……

英一 両親がそんなで、娘が評判の美人では、悲劇だね。

谷 我々が来るんじやあ、しんみりしないからということになつたんですね。

みさ子 まあ、そういうことね。——でも、（間）私、どうせ、御相談は受けても、それほど頼りになる決定なんか与えてあげられる處ではないと思つていてるわ。

英一 どうしてですか？

谷 珍らしい弱音ですね。

みさ子（二人を見）ほんとよ。却つて、結婚しないうちの方が、頭でだけ考えて、明快に、善<sup>よし</sup>悪<sup>あし</sup>でも云つたと思うわ。事実に入つて見ると——難しいんですもの。まるで、概

論じやあ、行かないのよ。例えば、相手の人の人格とか教養とかいうことだつてもね、それは勿論、何かの標準にはなるに違いないけれど、友達と良人とでは、何だか、まるで違うものが現れて来るのよ。——ね、そうお思いにならなくつて？

英一　さあ——

谷　そこまで行くと、我々は未丁年ですね。

みさ子　（考えつつ）結婚生活では、普通、正しい人間とか、善い人とか云つてゐる、もう一重底の蕊しんが現れるのじやあないかしら。うまく云えないけれども。つまり、こういうことになるのね。或る人が、誰にきかせても、正しいとほか云われないような考えを持つてゐるとするのよ。考えよ。友達の間は、或る程度まで、その考えだけで、つき合い調和して行けると思うわ。けれども、結婚した生活では、その考えと、実際の物事に触れて起つて来る、その人のしんからの心持とが、どの位ぴつたりしているか。それが直接の問題になつて來るのね。だから、いくら、その考えが、思想なり、理論なりとして間違つたものではなくても、自分が、事実、胸ではこだわつていながら、正直にそれを見ないで、自分も相手も、ただ理攻めにしようとするなんか、ほんとに堪らないわ。

谷　（眞面目になり）あなたの話しようが、ひどく抽象的だが、人間が純粹か不純粹か

ということが、第一の問題だということでしょう？

みさ子 そうね、そういうことになるでしょう。

谷 昔から、殴られても、実意のある亭主が好いというのは、そこでしょう。

みさ子 ——とにかく、厭なら厭、好いなら好いで、蕊に一点の曇もないような人があるたら、どんなにいいでしようね。言葉の奥を考えずに、そうと云つただけで安心していられるようだつたら……：

谷 (しげしげとみさ子を見る) あなたもだんだん大人になりますね。

みさ子 (片頬笑む) ——だから、朝子さん、吉沢さんね。の方のことだつて、私が、何も權威あるらしい口は利けないのよ。お互に、学校の成績とか、手腕じやあないわ。内の内の、内のものを、見極めなければならないんですもの。——各々の直覚、心の力と、運。ね？

谷 ところが、どれほど鋭い天稟<sup>てんびん</sup>の直覚を持つていたつて、多くの場合、日本の現在の状態では、その触角を動す余地さえ、ないじやありませんか。いやしくも、わが心のエッセンスを凝<sup>こら</sup>して、その底までしみ入ろうとするような価値のあるサークルは、皆、煉瓦の壙で囲まれている。少し云い過ぎかもしがれますが、僕から見れば、あなただつて、自由

が最も必要な時期がすんでから、その必要を高唱し得るのだ。びっくり箱の蓋を開ける前に、中から大凡どんな形のものが出るか、予め教えて下さつただけ、他人の親より、あなたの御両親は優種だつた。

みさ子 奥平と交際させてくれたこと？ 比較すれば、有難く思わなければいけない訳ですわね。だけれど——（苦笑）奥平もその時は、未婚者で、私の家に遊びに来て、まさか——数字ばかり書いてもいられなかつたでしよう。

谷 はははは。然し、何ですね——（躊躇する）

みさ子 （無邪気に）なに？

谷 いや——

みさ子 ——（次第に亢奮が鎮る。先刻から自分と谷とばかり喋っていたのに心付き）まあ、随分ひどい御主人役ね、一人で喋り込んで。

（先ほどから、硝子扉の傍の椅子にかけ、独りでレコードを見ている英一に）

みさ子 どう？ 何かお気に入りそうなのがあつて？

英一 大分殖ふえましたね。

みさ子 シヤリアピンやなにかのが来たからでしょう？

(立つて、英一の處へ来る。英一椅子から立ち、みさ子を掛けさせる。余り浮かぬ顔。ヌツクの方で、こちらに背を向け庭を見ている谷の方を一寸見、低声に)

英一 あれに、矢鱈<sup>やたら</sup>なことを云つてはいけませんよ。

みさ子 (かがんでレコードを調べていた手を止め、仰向き、訝しげに) 何故?

英一 (尚低声に) あいつは危険だ。ドン・ジュアンだもの……

みさ子 (笑う) 平気よ。(改まり) 私、誰にきかれたつて、悪いことなんか云いはしません。

英一 あなたはその氣でなくたつて――

みさ子 いいのよ。(氣を悪くし) ジやあ、貴方は、二年も前から、そんな人を、私のお友達にさせた訳?

英一 (言葉なし。みさ子が取ろうとするレコードを手早く抜取つてやる)――遣りますか?

みさ子 どう?

英一 いいでしよう。

英一 把手を廻し、針をつけなどしてレコードをのせ、蓋をする。

みや子は、椅子の上手よりにゆっくりと靠れ、英一は反対の腕に軽く腰を休ませて聴く。谷、煙草を持ち、時々歩き、立ちどまり、凝つと、みや子の集注した横顔を見守る。暫くの間、ピアノ、ヴァイオリンの前奏。

谷 何です？

みや子 （その方は見ず、低い声で） アデイオ。

静かな、明るい部屋の裡に、伊太利の小曲リードが、感じを以て満ちる。

戸外では、雲が湧いたと見え、微かな陰翳モヤが、輝やいたフォールディング・バーの面を過ぎる。歌、終る、沈黙。やがて、聴っていたみや子が、感動の溜息とともに頭を擡げる。

みや子 いいじやがないの？

英一 何にしろ伊太利語は響がいいな。

みや子 ほんとにいいわ。（詩句を暗誦する）

Caden stanche le foglie al suol, Bianche strisce serpon sul l'onda, ……

歌えたら、どんなにいいでしょー。

谷 稽古なやー。

みさ子 駄目よ、私の声は。——ね、だけれども、誰でも、時々、種々のことを感じて、もう歌でも歌わずにいられないようになることがあるでしょ?

そんな時、はあつと、すっかり自分の心持を歌いつくせたら、どんなにか嬉しいだろうと思わ。私なんか、自分の感動を、まるで現させないんですもの（だまろうとし、また、我知らず云いつづける）もとなんか、一寸悲しいことでも考えて、涙を一粒こぼせば、すっかり気分が変つてしまつたけれども、この頃は——（獨白的になる）だんだん、だんだん胸が一杯になつて来るばかりですもの。歌いたいわ。ほんとに歌つたら好いと思うわ。歌つて、すっかり私の悲しさや、寂しさや種々なものを、みんな空へ溶かしてしまうの……：

谷 みさ子さん。歌えないでも、あなたの寂しさや悲しきが飛んで行つてしまつ法を教えてあげましょ?

（英一、きつとして谷の方を見返る。谷、関せず。）

みさ子 （自分の考えに沈んだまま、漠然と）何なの？

谷 奥平さんを、もつとあなたへ引つけて置くんです。心持の上でね。

英一 （嫉妬を感じるように）おい、詰らないことを干渉するなよ。みさ子さんだつて——

谷 一人前の淑女だ、というのだろう？ 決して失礼なことを云いやしないよ。僕だって一箇の人間だからね。（声を大きくし）ね、みさ子さん、あなたは自分の歓びも悲しみも、ただ奥平さんにだけ的を置いていらっしゃるでしよう？

みさ子 （単純に） そうよ。

谷 だから、奥平さんは、平気であなたを打つちやつて、青だの、赤だの1・2・3ばかり書いていらっしゃるんです。

みさ子 だつて——私は、奥平ほか——奥平だからこそ、一緒に楽しんでくればほんとに嬉しいんだし、そうでなければ淋しいんだわ。ほかの人なんか——いくら私を放つて置いてたつて平気よ。

谷 実にはつきりしたもんですね。（笑う）然しね、これは、青二才の僕が云うのじやあなくて、ちゃんとした大学者も云うことですがね、異性間の感情というものは、決してそれほど簡単明瞭に片の付かないものなのです。だから御覧なさい、あなたの方こそ、そういう、はつきりしているけれども、それが果して奥平さんの胸にどれだけ響いているか、疑問でしよう？

みさ子　——それは解らないわね。安心しているのか、もうどうせ他に向きようもないと  
きめて、放つて置くのか、……。

英一　（突然、口を挟む） こういう問題は、議論すべきものじやないと、僕は思うね。  
時間が自ら証明する。まして、みさ子さんなんか、失礼だけれども、結婚してから、半年  
ほかほど経たないんだもの。傍から攬乱するようなことは……。

谷　——攬乱は穩やかでないね。——君は、みさ子さんが、僕の一寸云うこと位で支配  
される人だと思うのか？

英一　（曖昧に） そうじやあなかろうさ。然し——

谷　それに、夫妻というものだつて、どれほど、鶴と亀とでお伽噺にしようとしたつて、  
結局生きている人間の、男性と女性との生活だろう？

英一　そんなことは定つている！

谷　それなら、一般論として、男性女性の相対的関係を話したつて、どこに悪い処もな  
い筈だ。

英一　（焦々し） 一般論に止つていればよいさ。然し僕は……

谷の、耀いた、冷静な眼で見つめられ、英一、むしゃくしやとなる。

谷 仕舞まで話させてくれ。——それでね（みさ子に向い）人間は通性として、反動的なものです。自分が、何なく手に入れられ所有されると定つたものには、何といつても興味が薄れ、無感興になつてしまふが、どうも難しい、余程の忍耐や手段を講じなければ、到底指も触れられないとなると、たとい、實際そのものの価値は低くとも、人間は熱中し夢中になる。だからまあ、選挙などというものが、飽きもせず亢<sup>エキサイティング</sup>奮<sup>サイティング</sup>的な訳でしうがね。——同じ心理が、矢張り、異性間の感情にもあるのです。

みさ子 （率直に）思わせぶりがいいの？

谷 まさか！（苦笑）そればかりということじゃありますまい。——然し、夫婦の感情が鈍重<sup>ダル</sup>になるのは、確に一つは、互がもうすっかり互の所有になりきつて、動きの取れない処にあるんだろうと思いますね。一方からいえば、もう死ぬまで、厭でも応でも、この男、この女、と定つてしまつた処に——現在の社会では、定めるべく余儀なくされる処に、第一の苦源があるんです。だから、双方の感興、新鮮さを潑瀝とさせて置くためには、どうしても感情的變化に富んでいなければならない——或る不安、緊張、亢奮が薬になるんです。

みさ子（真面目にきき、考えつつ、疑わしそうに） そうお？ そうかしら——そういう

胸のわくわくするような心持は、恋人同志の時代のものじゃあなくなつて？ 若しかしたら（笑う）恋人前期よ。恋人だつて、お互のほんとの愛がわかり、信じられたら、そんなに氣は揉まないんじやあないかしら。勿論、相手の人が、どれだけ自分を愛してくれるか、まして、好きか嫌いかさえ解らないうちなら、不安にもなり、緊張もするだろうけれど。

谷 結婚してしまふと、男も女も、皆そういう樂天家——凡庸主義に墮してしまふから、生活が重荷になるんですよ。大抵の女の人が会つて面白いのも、結婚する迄やあありますせんか。一旦、奥さんになつたとなると、誰某アンネックスで、まるで気抜けになつてしまふ。

みさ子 だけれども、生活が氣持よく行くというのは、ただ相手の技巧や「面白い人」許りではなくつてよ。面白い人間という人なら、ざらにあるわ。ちつとも面白くない人だつていいから、氣持の満干が、ぴつたり両方で合うことが大切だと思うわ。

谷 氣持の満干そのものが、既に感情の彈力じやあないかな。活々した流動を起すには、いささかの冒険、心もとなさが、入用だというのです。

みさ子 貴方は——こうなのね。この人が厭で詰らなければ、また別な人、という人の方が変化があるとおつしやるんでしよう？

谷 たとい、実際行つてしまわないでも、それだけ張はりのあるということですね。

みさ子 まあ一寸風をする、というの？ いやあね。私そんのは嫌いだわ。行くんならほんとにさようならをするほかない、いるんなら、どんなにでもしている。――

谷 それで――あなたは後の方だ、とおっしゃるんでしよう？

みさ子 （殆ど痛ましいほどの顔をし）あの人ほか私に大切な人はいないんですもの。

谷 その大きさを奥平さんにも感じさせるためには、あなたが、もう少し彼の方を、はつ、とさせなければ駄目です。自分の心には、今二つの愛がある。そのどちらを取るかというようなことで、彼の方を、もうひとつ反省させ苦しませて上げるのです。しから、ほんとの愛が輝き出すか、詰らない石ころが転り出るかを、知るためにね。

みさ子 （絶望的な烈しさで）私二つの愛なんかありはしないわ。たつた一つよ。（思い切つて）奥平が可愛いだけだわ。あの人に可愛がつて貰いたいだけだわ。

谷 だから、それほどの愛に報いられるためには。

英一 二人の会話をきき、歩き廻っていた英一、殆ど、顔色を変え、

谷 谷！ やめろ。まるでみさ子さんを苦しめているじやないか！

（微かな亢奮を持ち）苦しめるのじやない。終局に於て、持つていられる感情を、

一層純粹に生かすためだ。

英一 傍で聞いては、まるで誘惑しているとほか思えやしない！

谷 —— 橋詰。君の態度は、失敬ながら、崇高じやないよ。他人を非難することは、何も自己の優越を表しはしない。——（英一を見守り）男一人の心、で当つたらいいじゃあないか。（獨白的に）君のみさ子さんに対する友情はよく判つてゐるよ。

英一、みさ子の方をちらりと見、あわてて何か云おうとする。みさ子、二人の会話はきかず、掌に顎をのせて考へてゐる。この時、さつと立上り、考へを変えようと、頭を振り。

みさ子 さあ……もう議論はやめ。——紅茶でも入れさせて来ましょうね。（去る）

沈黙、穏やかでない雰囲気の裡に、谷、英一、顔を見合せず、動かず、幕。

## 第二 庭

常緑樹の深い植込み。間を縫つて、奥の方に小径があり、上手、屏風のように刈込んだ檜葉ひばの下には、白い石の腰架ベンチが一つある。

傾いた午後の日が、穏やかに明るく、緑樹の梢、腰架の縁などを燐めかせる。

幕開く。

みさ子、谷、上手の方から悠<sup>ゆう</sup>くり連立つて出て来る。

みさ子　あの薔薇だつて、爺やが丹精してくれたから綺麗に咲いたのよ。私も、奥平もいつこう構わないんですもの。

谷　ここはいつも氣持がよう<sup>う</sup>ござんすね。（四辺を見廻し、腰架に掛ける）

みさ子　（離れて立つたまま）英一さんはどうしたんでしよう、直ぐ来るつて云いながら

谷　奥平さんに用があるんでしよう。（皮肉な調子）

みさ子　奥平に？　そう？　ちつとも知らなかつたわ。それならそうおつしやればいいのに――。妙な人！

谷　そう、くささずに置いてお遣りなさい。あの男は、あなたのことといえど、真剣なんだから。

みさ子　――（意味を解しかねて谷の顔を見る）

谷　僕が、あなたに勝手な熱を吹くと思って、お冠を曲げたのですよ。然し……あの男

の思うほど、僕は「不良」じゃありませんよ。これでも——（調子を変え） 実際、今日のsuchな話が、あなたと出来るのは思いませんでしたね。

みさ子 （谷の心持が解らず） どうして？——別に、何にも、人間のしない話をしたのじやないわ。

谷 ——一年昔のあなたは、幸福過て、思いのままでありすぎて、僕なんかには眩しいようでした。却つて、薄すり雲の湧上つた今の方が、遙に人間ヒューメン的で、あなたの情熱も純粹さも美しく見える。（みさ子の顔を見る）

みさ子 （漠然と不安を感じる） 何を云つていらっしゃるの。美しければ美しいほど猶結構じやがないの。——さあ、裏へ行きましょうよ、あんなに薔薇、薔薇つて云つてらっしやつた癖に……（谷を促す）

谷 じき行きます。然しね、実際、僕は、いつかきっと今日のような時が来ると思っていたんですよ。まるで、軽風に頬を吹かれて、花束を振るようなあなたが、いつか、自分の愛や、人間の愛ということに就て、深い疑や苦しみを味うようになるだろう。そうしたら、始めて、私の、あなたに対して持つている心持も理解して貰えるだろうとね。

みさ子 （疑わしそうに、凝つと谷の顔を見守る） 私、自分の苦しみや寂しさを、たとい、

誰にでも、利用されてはいられなくつてよ。

谷 まるで異う。一つの道から、もう一つ先の、明るい、輝やいた路へ出る手助けを、僕ならさせて頂けると信じていたのです。僕の、あなたに対する愛は——云うことを許されれば——恐らく、あなたの御良人のように、所有慾から生れたものでもなければ、英一君のように、自分の無力を偽善で被うたものでもありません。あなたという人を心にも体にも、美しさ、愛らしさの絶頂に置いて見たい。何からも自由にし、私が陰から照らす光りで、あなたを、漂う金色雲のようにしてあげたいのです。

みさ子（不快と畏れとを示し）貴方はいやね。そういうことをおつしやるために、わざわざ薔薇をだしにお使いになつたの？ 私、ここそこ話は大嫌いよ。それに（力を入れ）——私は、ちつとも、貴方になんか助けて頂こうとは思つていなくつてよ。また貴方こそ、私をほんとに愛して下さる方だとも思えやしないわ。芝居はやめ！ お友達か？ そうでないか？ それつきりよ。

谷 奥平さんの存在を、直ぐ頭に持つて来るから、あなたはそうむきになるんだ。そうでなく、深く、冷静に、人間の感情生活ということを考えて——抑制と爆発は、決して別々なものじやない。いつか……

みさ子 貴方——貴方は、私のしんの心持が解つた積りでいらつしやるの？（静かに、寂しそうに）若しそうだつたら、大違ひよ。奥平さえ解つてくれないんですもの。私位の年の女が、一旦可愛いと思つたらその人のためにどれほど全心を集注させるか、そのためには歓び悲しむか、大抵の男の人になんか、わからんなどと思うわ。選択以上なのよ。たつた一人つきりなの。見限つて棄てられる愛なんか、まるで、まるで遊びだわ。よからうが、悪かろうが、その人の可愛い自分の心を、どうしようもないから、苦しむのじやあないの？

谷 そういう心持も、僕は時間と程度の問題だと思うな。人間が愛されずに生きて行かれますか？ まして、あなたのように暖い、愛されたい人が。

みさ子 谷さん！ それだけで、もう貴方が、どんなに私から遠い人だかがわかつてよ。どうして、私が求めてもらられないで苦しんでいる愛を、そう惨酷に摘発なさるの？

——もうおやめなさい。——お友達にしたつて、変な、いやな気持になつてしまふじやないの。

みさ子、歩きかける。

谷 まるで子供扱いでは、僕も云いようがなくなります。然し——みさ子さん、これだ

けは云わせて下さい。愛には、勿論、種々様々な形と内容とがありましょう。けれども、結局、鳴らぬ笛は、鳴らぬ笛なのです。——（腰架ベンチから立つ。）それでは、裏へ行つて見ますか？

みさ子、黙つて先に立つて行く。

殆ど、入れ違いに、下手から、英一、奥平、低声に話しながら出て来る。

英一（压えた声調で）——実際、僕としてこういうことを云うのは苦痛です。一方では、谷との友情を裏切ることになるし、また、貴方に對しては、そんな責任のない交際を始めさせたという点で。けれども、貴方が、僕にかけていて下さる信頼を思うと、つい黙つていられなくなつたのです。

奥平（陰鬱に）いや、有難う。御厚意は感謝します。

英一（奥平を偷ぬすみ見）けれども、くれぐれ、僕の申上た点を誤解なさらないで下さい。

これだけは、僕一生の願いです。僕はただ、みさ子さんが、まるで無邪氣で、子供のように思つたことを云うのに、それを間違つても、あの男になんか悪用させたくないから、御注意したのですから。

奥平（神経的に）実に人間の心などは頼みがたいものです。自分は、自分のよしとする

ところを実行するほかない。（考えに沈み、両手を兵児帯の後に挿み、彼方此方歩く）彼女が、心に確かな根柢の出来ていなることは、私も前から知っていました。よく云いもしたのだ。いつかこんなことでも起らねば好いがと思つていたが……

英一（絶えず不安そう、奥平に近より）ね、奥平さん貴方はほんとに誤解していらっしゃるんじやないんでしようね。何も、不名誉な事実なんか決してあるんじやないんです。ただ、

奥平 誤解はしていない積りです。——然し、事実というものの範囲を、どこまでに限つたら好いか。

英一 貴方の立場として、どれほど不愉快に感じられるか、僕は御同情します。けれども（俄に）みさ子さんに、不当な監督なんかさりはしないでしようね。

奥平（投げたように）彼女は、<sup>あれ</sup>彼女のしたいようにすれば好いのです。私は、それをどうかく云う権利はない。

英一（咳く）何だか不安だな。恐ろしいことになりそうだ。奥平さん、どうか、僕にだけ、貴方の取ろうとなさる方法を話して下さいませんか。ひどく不安心です。

奥平 私が、自分の心持なり考え方を、小説家のように巧く云い表せれば、何も面倒は

ないのです。私は、喋れない。思つたこと、考えたことを実行するだけだ。また、それでよいと思つています。黙つていて解つてくれないような者に、何も自分から説明する必要はない。——君は、とにかく私の信頼する一人の友人として、自分の責任と思うところを果されたのだから——どうぞ安心して下さい。なるようほかならない。

英一（猶圧迫を感じ）けれども……

奥平 人生は、快樂のために出来ているものではないのです。生きている間じゅう、苦しまなければならないのが、人間だ。与えられた杯なら、飲まなければならない。

英一 どうぞ、貴方もみさ子さんも傷つけるようなことはなさらないで下さい。——實際、僕は、何もみさ子さんまで……

奥平 ——（陰気に光つた眼で、じろりと、臆病な英一の顔を見る）

突然、背後の植込みの蔭から、甲高く、はつきり、

みさ子の声 いやよ！

奥平、英一、思わずぎよつとするところへ、みさ子、足早に出て来る。二人を見、  
みさ子 まあ、貴方もいらしつたの？（嬉しそうに、奥平の方によつて行く。）

直ぐ後から、谷、両手をポケットに入れ、眉を顰めて来る。

英一 （意を迎えるように）どうだね。いい花があつたかい？

谷 （英一を見、奥平を見、鋭く）花なんかないよ。昔話だ！（さつさと一人で通り過ぎようとする）

英一、不決断について行こうとする。その時、ただならぬ奥平の声が、彼を振返らせる。

奥平 （近づくみさ子を避けるように、二三歩動きながら）——私に構わず置いてくれ！

みさ子、驚き、良人、英一、谷と、順に顔を見る。英一、頭を動してその視線を避け、見向きもせずに彼方に行く谷の後から、救いを得めるように、蹤もとついて行ってしまう。みさ子、再び、良人を眺める。

みさ子 貴方——どうなすったの？

奥平 ……。

みさ子 ね、どうなすったの？

奥平 （傍を向き）悲しいことに、私も人間だから、自分と直接、関係のある者の行為には、心を支配されるのだ。

みさ子 ……（苦しそうな表情となる）……。

奥平 私は、就くものはつき、離れる者は時が来れば離れずにいないと思つたから、別に云いもしなかつたのだが……。今でも、私は何の制限も、あなたに加えてはいないよ。断つて置くが……。

みさ子 （実に驚き）まあ、貴方！ 何を思つてらつしやるの？ 何を感違ひしてらつしやるの？

奥平 何も、感違ひなんかしていない。事実は、事実だ。

みさ子 （一層、良人の傍により）私が何をして？ 貴方。——（思いつき）ああ、今私があんな大きな声をしたのを変に思つていらつしやるんじゃないこと？ 何でもないのよ、あれは。谷さんが、今日は妙に感情的だから、もう散歩なんか一緒にするのは、いやよ、と云つただけなのよ。

奥平 （険しい眼付きをし）感情的には誰がしたのだ。

みさ子 （良人を仰ぎ）貴方！

奥平 独身の、あんな生若い男に、若い、結婚したばかりの女が、自分の生活の不満や苦痛を訴えるのは、何を意味するか。考えて見たら、誰にでも解るじやないか。

みさ子 （思いがけず。却つて落付き）聞いていらしつたの？——却つてよかつたわ。で

も——立ち聞きをなさるなんて——（消え入るように）何て方でしようね。

奥平 英一君に聞いたのだ。

みさ子 （はつきりと侮蔑を感じ）あの人人が？ 何て云つたの？

奥平 そんなことを、今ここで再び繰返す必要はない。ただ——私は——僅かの間でも、あなたの良人であつたことを氣の毒に思うよ。適當な人間ではなかつたのだ。少くとも、あなたの悦ぶ男ではなかつたのだ。然し（刺すように）誰一人私にそのことを知らせてくれる者はなかつた！

みさ子 （蒼くなり、良人の手を掴み）貴方！ 後生だから、その変な、貴方の頭にあるものを棄てて頂戴！ ひどい思い違いをしていらっしゃるわ。何ていうことだろう。私は、これっぽつちだつて、谷さんなんか愛していやしなくつてよ。

奥平 （疑い深く）どうしてそれが断言出来る？ 自分が侮蔑し、価値を感じないものに、あなたは自分の苦痛を訴えるか？ 下男に泣言が云えるか？ 自分が、より好意を感じている者に対してでなければ、人間は、決して自分の弱点は示さないものなのだ。

みさ子 ——私は、ちつともそんな風には考えなかつたわ。私の苦しみは、私の弱点？ 私は、ただ、もとから種々なことを話して來た友達に、自分の心持ちを云つただけだのに。

奥平 つまりそれほど、心の親しみが深いということになるのだ。離れ難く思うからこそ、どんなに境遇が変つても、その友情だけは、保つて行こうとする。——（堪え難いように、ばしばしと）私は、はつきり云つて置くがね、決してあなたの重荷となる積りはないのだ。私はいつでも、悦んで、あなたに自由を与える。よく考えて、遠慮はいらないから、自分の行きたい道を進めばよい。ああいうこともあつた、と私は万事を、過去に埋めてしまおう。それが一番いい。私には——私の書斎がある。……

みさ子 （涙をこぼし） そうよ！ 貴方には貴方の書斎がある。だから、そんなことをおっしゃれる。自分が、どんな大間違をしているか、考えようともなさらないで、よく貴方は、そんなことがおっしゃれるわね。……私には……私には貴方つきりほか、ありはないわ。何も、ありはしないわ。だからこそ、貴方になんか、相手にもされない苦しみをもするのじゃがないの。

奥平（冷やかに） 愛は、苦しい筈のものではないよ。愛し難い者を愛そうとするからだ。  
みさ子（首を振り） いいえ。いいえ。どれだけ、私が可愛いか、貴方が判つて下さらないからよ。

奥平　——私は、若し強いられたのなら、たとい、事実上過ちがあつたとしても、許す。けれども自分から、自分の心も相手の心も翻弄する人間との関係は堪えられない。——苦しめられたくないのだ。——いくら、価値のない人間でも自分の魂の平安を守る位の権利は与えられているだろう。

みさ子　（涙と一緒に奥平の手を搔すり）ああ。貴方は恐ろしい方ね。言葉の裡にある真実を、ちつとも聞こうとはなさらない。ね、どうしたら、私の心がわかるの？　どうしたら嘘を云つてはいながらわかつて？

奥平　事実が言葉と合致すれば。

みさ子　だから、さつきから云うじやないの？　私は——ああ（激しく泣く）云うのさえいやだわ！

奥平　人間には、言葉以上に微妙な世界があるものだ。まして、異性間の感情には。——あなたは、谷を愛していないと云う。或は、事実だろう。然し、一方に、私は、また、愛している事実も認めずにはいられない。（憤りをはくように）愛します、と誓った愛が嘘になる時もあるようだ、愛さない、という愛が、却つて眞実なこともあるのだ！

みさ子　ああ。ああ。こんなに愛しているのに。貴方には！　こんなに、可愛いのに！

みさ子、泣きつつ、子供のように自分の額を、良人の手に擦りつける。

奥平　（苦々しげに）亢奮が、何の解決になるのだ。……

みさ子、頭を擡げる。良人を見、絶望でくい入るように、

みさ子　ああ、貴方は開かない扉よ。叩いても、叩いても開かない扉よ。——私はどうすればいいの?——人間は、言葉でほか、自分の心が表わせない。（烈しい歎歎<sup>すすりなき</sup>。）その言葉を信じられない時。——（蒼白な顔となり）昔の女の人は死にました。私が死ねなかつたら——。貴方は、それ見ろ! とおつしやること?（良人に、じりじりと迫る）それ見ろ! 谷を愛していたのだとおつしやること?

奥平の手を掴み、そのまま凝固したように立ち竦む。恐ろしき寂寞。一秒……一  
秒……さつと　幕。

## 青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第一巻」新日本出版社

1979（昭和54）年6月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第5刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第二巻」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

入力：柴田卓治

校正：松永正敏

2002年1月8日公開

2003年6月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 火のついた踵

## 宮本百合子

2020年 7月17日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>